



発行 早稲田大学校友会  
鹿児島県支部  
住所 鹿児島市金生町3-1  
山形屋本部秘書室  
☎0992-27-6310(代)

# ご存知ですか？

## ～県内に住む校友の数～

いきなりですが、早稲田大学校友会鹿児島県支部に関する数字クイズに挑戦してください。

Q1 鹿児島県内に住む卒業生は何人？

- ① 一五〇〇～二〇〇〇人
- ② 七〇〇～一〇〇〇人
- ③ 三〇〇～四〇〇人

Q2 鹿児島県出身の現役学生の人数？

- ① 四三〇人
- ② 二九〇人
- ③ 二二〇人

Q3 今春の入試で鹿児島県内の高校を卒業し合格した受験生の人数？

- ① 一六二人
- ② 八七人
- ③ 三五人

(正解は以下の文章中にあります)

### 鹿児島県内に

#### 住む卒業生

校友会鹿児島県支部が、昭和六十三年七月現在でまとめた支部会員名簿に記載された会員数は四百八十一人。しかし所在を把握できず、記載できなかった会員も相当数いると見られ、校友会本部に登録されている鹿児島県内を住所とする卒業生数千五十二人とは大きな隔たりがあります。もともと校友会本部の把握している卒業生については、校友会会費納入時に住所変更などの届けがあった場合を除き、卒業時の申告住所をもとにしていると思われ、必ずしも現在でも鹿児島県内に住んでいるとは限りません。一方で、卒業後何年か後にUターンしてきてても校友会に届出がなければ、鹿児島県在住とは登録されないのです。その分の増加をみる必要があります。従って、県内に住む卒業生はこれらの増減要因を勘案して、だいたい七百～千人というところではないかと推定されます(①の正解②)。ちなみに、現住所を校友会本部が把握できる会費の納入状況ですが、鹿児島県の納入者は平成二年度で約二百人となっています。

支部会員名簿に記載された四百八十一人を卒業年次別にみると次のとおりです。

大正十年代	五人
昭和ひと桁	二〇人

昭和 十年代	七七人
二十年代	三七人
三十年代	八五人
四十年代	一〇五人
五十年代	一三七人
六十年代	一五人

昭和四十年代後半から五十年代前半の十年間の卒業生が最も多くなっています。地方の時代と言われ、また石油ショックによる不況の影響でUターン者が増加した時代であったことが思い出されます。年次毎の推移を詳しくみると昭和十九年、三十一年、四十一年、五十一年と十年おきぐらいに多い年次があり、当時の世相と帰郷者の数が相関していることがうかがえます。

### 最近の卒業生の

#### Uターン動向

現在、鹿児島県出身の現役学生の人数は二百九十人(②の正解②)。この数が以前に比較して増加しているか、あるいは減少しているかは確認できませんでしたが、早稲田全体としては首都圏出身者の占める割合が増加傾向にあります。いわゆる早稲田らしさの背景にあった地方出身学生の多さという状況が変わりつつあるのは残念です。

今春の入試における早稲田の合格者数は約一万五千人。うち鹿児島県内の高校を卒業した者は百六十二人でした(③の正解①)。現

役学生の数に比べかなりの多さですが、その出身校の内訳をみると、ラ・サール七十四人、鶴丸五十七人と二校で八割を占めています。ラ・サールの場合、県外出身者もあり、また両校とも他大学との併願受験も多いようです。これらの点を考慮すると、鹿児島県出身者で早稲田へ進学する学生は年間五十～百人程度ではないかと思われ

ます。さてそのうち何人が鹿児島へ帰ってくるかですが、ここ何年かは好景気を背景に以前より減少しているのは確かです。県庁、市役所、鹿児島銀行など卒業生の多い職場でも新人が少なくなっています。校友会本部の登録をみると平成元年、二年の卒業ではそれぞれ二十人程度鹿児島県の住所が届けられているものの、理工学部の卒業生も相当数おり、それらの学生の就職先が県内にそれだけあるとは思えません。実際には卒業生の一割程度、五十人ぐらいが帰ってくるというところのようです。

以上、県内在住の校友の数について簡単にレポートしてみました。今年度は支部会員名簿の更新も計画されています。記載もれの校友を知っておられる方は、是非校友会鹿児島県支部事務局宛て一報ください。

鹿児島地域経済研究所

磯 大作  
(S51年政経学部卒)

シリーズ

集まり散じて

(5)

薩摩再発見

第一生命鹿児島支社副支社長

田辺浩三

(S46年政経学部卒)



鹿児島で仕事をするようになり、はや四年が過ぎました。今ではすっかり鹿児島の人になりきり、鹿児島での素晴らしい生活を満喫しております。毎年数回東京に出張しますが、東京の雑踏から離れ、鹿児島空港に到着し、桜島と霧島連山を見あげると鹿児島に帰ってきたとホッとします。私の故郷は東

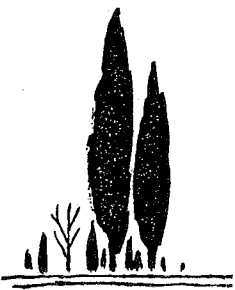
京なのか鹿児島なのか、どっちだったのかと嬉しい錯覚に浸っております。今ではあたりまえに感じておりますが、鹿児島に赴任した当初、感激を新たにすることを思いつくまま書いてみたいと思います。

まず、『鹿児島にはまだ学校教育があつた』ということ。学校の指導運営がしっかりしていることはもちろんのこと、子供を通じて接する小・中学校の先生方は子供の教育に対し誇りと情熱をもち、従って生徒の父兄も先生方を慕っているという学校教育を通じて良い信頼関係がまだ残っております。また、今年長男がK高校に入學しましたが、過度の受験戦争の是非は別として、現実には受験戦争を避けて通れないとすれば、K高校をはじめとする鹿児島の公立高校の一貫して徹底した受験対策を含めた教育指導は、父兄にとって子供を安心してまかせられるだけでなく、経済的にも大変有難いものと感激しております。

次に、鹿児島といえは西郷・大久保をはじめとした明治維新による日本の近代社会の創設がまず頭に浮びますが、実は日本の近代美

術の草創も鹿児島からはじまったことを知りました。黒田清輝、藤島武二、和田英作、有島生馬、東郷青児、海老原喜之助、安藤照、沈寿官、吉井淳二等々。鹿児島に来るまで絵画や美術にあまり興味がありませんでしたが、黎明館の帰りに市立美術館に寄つて以来、鹿児島の先人達の絵画、焼物等に魅せられ、新しい体験・新しい世界が広がりました。

また、噴煙をあげる桜島と、どこから眺めても美しい錦江湾の景観に代表される恵まれた大自然と四季折々の美しい草花。県内いたるところ、市内でも楽しめる豊富な温泉。それに何にもまして、おっとりして人間味あふれた県民性、特に薩摩おごじよという言葉に代表される、しとやかな中にも芯があり、よく働く女性。転勤辞令を拒否して永住の地としようかと真剣に悩んでいる今日のごころです。



とにかく残念だった。

日本の圧倒的有利(地元日本で開催)にもかかわらず、初日のシングルスで一敗。早くも王手である。三月二十一日から鹿児島島に入り、調整に励んできた日本チームが、初日にこの様な結果になるとは思つてもみなかった。

実際、日本チームのマネージャーをしていた私もさすがにショックであつた。しかし、二日目のダブルスで初出場の佐藤哲哉君の頑張りで辛くも最終日まで持ちこたえた。

何故、下馬評をくつがえしたかというところ、フィリピンチームはこの半年余りの間、自分の試合を犠牲にし、デ杯の為に全力を注ぎ込んできたのである。

デビスカップ 日本VSフィリピン戦を観て

鹿児島海陸運送取締役営業部長

大西儀朋 (S59年教育学部卒)

ナショナルメンバーを作り、対抗戦を数多くこなしてきた。その結果が今回のデ杯戦の結果につながつたと思う。チーム一みてもまとまりがあり、リラックスした奮闘気が漂つていた。こちら日本は、終始落ちつかず、松岡修造君に頼りきつていている。配すらあつた。日本のエースとして、一時は世界の六十位まで顔を出したことのある男は、負けられないプレッシャーもあり、精神的に崩れていった。

三月二十八日の抽選会(土屋知事、東京開催の場合は内閣総理大臣)から始まり、翌二十九日の開会式。鹿児島でも二度と行われないデビスカップである。県民の皆さんが一体となつて日本を応援し、デビスカップのすばらしさ、その重さをひしひしと感じた三日間だったと強く感じる。



日本チームメンバー(後列左から2人目筆者)

これを機に、本腰を入れてスポーツ交流、国際交流の南の窓口となるよう前進していただきたい。最後に、会場となったエルグの総指揮官・津曲貞利氏(S59年法)に心から御礼申上げます。それにしても勝ちたかつた!

ふるさと

鹿児島



鹿児島県総務部地方課

末吉 龍一郎

(H11年法学部卒)

のだ。校歌や応援歌が嫌いなのではない。ただ、一緒になって歌うのが妙に気恥ずかしかったのだ。

卒業後、鹿児島県庁に入り総務部地方課に配属された。この地方課は、市町村の行財政運営のアドバイザーのようなもので、私のいる税係は、地方税と地方交付税を扱っている。市町村から何かと頼りにされており、やり甲斐のあるところである。

入庁当時の係長が、稲門の先輩である岩切久治さんであった。右も左もわからない社会人一年生の私を、温かく見守って下さり、公私にわたり良きアドバイスをして頂いた。同じ稲門であるからといって特別どうこうということでは

早稲田の森を出てからはや二年が過ぎ、標準語もすっかり忘れてしまった。学生時代は、ただ人が多いと思わなかった東京が、この頃やたらと懐かしい。浪人のあと、五年間を学生として過ごしたが、振り返ると早稲田というところは、本当に懐が深かった。校歌の一節ではないが、日本中、世界中からいろいろな個性を持った人々が集まり、そしてまた、日本中、世界中に帰っていく。ものの方・考え方が自分と違う多くの人々と出会い、語り、そして自分自身についても、鹿児島についても見つめ直すことができた。人よりも廻り道はしたが、私はそれで良かったと思っている。

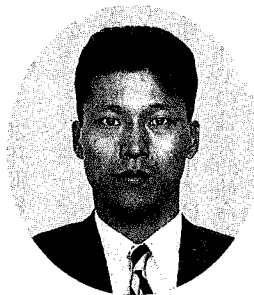


校歌といえは、早慶戦を観にたまに神宮球場へ出かけたが、友人と私は、決まって外野のはずれの席に座っていた。応援団から強要される校歌や応援歌がいやだった

ないが、何か相通するものがあるような気がする。

県下九十六市町村、ところ変われば品変わる、言葉も変わるし気質も変わる。同じ県内でもこうも違うものかと思うことが多いが、そこがまた面白い。仕事柄、付き

早稲田 気分



鹿児島市役所資産税課

宮里 幸弘

(H2年法学部卒)

合いがあるのは市町村役場の方が多いいが、自分のふるさとに誇りを持ち、もつともつと良くしたいという意気込みにあふれている方ばかりで、本当に素晴らしい。鹿児島に帰って来て良かったと思う。この頃テレビで「都の西北」が

分かっていったが、それでも悔しさが身をよじる。神宮に集いし早稲田の人間もさぞつらかったろう、ビールもさぞ苦かったろうと心配してしまふ。出来ることなら、高田馬場、あるいは新宿にて、来季の雪辱を誓い、酒宴に加わりたいと思ってしまう。そんな思いは、未だ全く抜けていない。学生の頃と同じ気持ちで勝敗に一喜一憂してしまう。恐らくは、あと半世紀程度は、変わらぬ気持ちでいられるのではないだろうか。そんな学生気分なら、僕は持ち続けたいと思う。

卒業して一年が経つが、学生時代を思い出して語るには、まだ早かるう。学生気分、あるいは学生体質がまだまだ抜け切れない自分である。そんな自分を少し自己弁護させてもらおうと、例えばこんなだ。慶応、早稲田を破り優勝」こんな記事が紙上を賑わせていた。すでに早稲田の優勝がないことは

流れてくることがあると、ジーンと来る。感傷的になる歳でもないのに、なぜだろう。

「集まり散じて人は変われど、仰ぐは同じき理想の光」 社会人となった今、もう一度この言葉をかみしめている。



母校である。

鹿児島に帰ってきて、眼前に毎日、桜島を望むことが出来るようになった。かの熱血漢新海一八が、お袖に対する己の気持ちを、我が胸の燃ゆる想いに較ぶれば、煙はうすし桜島山々と例えた山である。郷土を広く伝えてくれているように、僕は新海一八が好きになった。そして今は、早稲田人の一典型として新海一八が好きである。さらには、全国、万国にいるであろう何万にも及ぶ、それぞれの早稲田人に、同窓である、その一点において共感を覚える。それぞれが、早稲田の一典型として、早稲田の文字に心躍らせ、または落胆しているであろうことを思うと、いつまでも、僕も早稲田気分を大切にしたいと思うのである。



時は一刻も止まることを知らない。昔は柱時計をみると時計の針が止まっていたりして、ネジをまわすのも一仕事であった。

時計と言えば昔は目的の学校に入学できたとき、お祝いとして時計を買って貰った。腕時計をはめて嬉しそうに跳びまわったことを覚えている。その時計も今では、小遣いで買えそうな値段でデイスカウトショップで山積みして売られている。感激も何もない。それもすべて、クオーツの時代だから針が止まることもなく時がスムーズに流れていくように感じる。

小山宙丸新総長を迎える他、総会に先がけて開かれる講演会では、ピラミッドの研究や料理・クイズ番組などで人気の吉村作治人間科学部助教が講演します。

業後四十年過ぎて校友会費を一括で払うと終身会員になれる資格の身となった。長かったような短かったような四十年であるが、我ながら時の流れに驚いている昨今である。

第二次大戦が終り早稲田に復学したとき、鹿兒島から三十時間の汽車の長旅、それも座席に座れず廊下に新聞を敷いての旅であった。

# 流れのまゝに

早稲田大学校友会鹿兒島支部長

松元

茂 (S25年政経学部卒)

当時、東京は空襲の焼け跡がそのまま、麻布の下宿の近くを歩くと、麻布霞町から六本木の溜池へかけて小高い丘の感じであった。知識に飢えた当時は、リーダーズダイジエストを買うのに早朝から六本木の角の書店の長蛇の列に並んだものである。当時は物資不足で何を買うにも行列で、早稲田

の近くの食堂でもおかゆみたいな雑炊を食べるのにも行列であった。時は変わり、早稲田には女子学生が溢れている。本年度の卒業式には、早稲田九学部の内、七学部までが女子の総代であった由、早稲田ウイークリーで知った。大隈老候は何と感じておられるだろうか。早稲田もとうとう女子に占領された感じ、なんと男子学生のだ

らしいことか。早稲田は昭和五十七年、創立百周年であったが、来年は早百周年を迎える。百周年では二十世紀に向けての社会的使命を果たすべく、人間科学部の誕生を始め、数多くの記念事業が行われた。記念事業の大きな柱の一つであった総合学術情報センターが安倍球場

後援—南日本新聞社・南日本放送  
▽とき 八月三日(土)  
▽ところ 城山観光ホテル(〇九  
九二—二四—二二二)  
※エクステンション講演会  
午後二時三十分から(錦江の間)

## 早稲田大学校友会鹿兒島支部総会 エクステンション講演会

後援—南日本新聞社・南日本放送

▽とき 八月三日(土)

▽ところ 城山観光ホテル(〇九

九二—二四—二二二)

※エクステンション講演会

午後二時三十分から(錦江の間)



小山 宙丸 氏

※支部総会ならびに懇親会

午後五時三十分から(コリドルの間)

▽会費 七千円(運営費込み)



吉村 作治 氏

跡に完成し、この四月から開館している。世界の大学の中のトップクラスの規模と設備を誇る存在である由、何よりも嬉しい。大隈庭園横の会館跡にワセダロイヤルホテルが完成する頃は、早稲田界限は一変するであろう。

百周年をとりしきられた西原総長から、舞台の幕は小山新総長へと引き継がれた。西原総長の時代は、百周年の二百億円の募金活動、その資金による教育・研究環境の改善充実で活気があった。文学部出身の小山新総長は「大学とは何か」と新入生諸君に味わい深い人生哲学を語りかけておられる。

その中の一節「大学はもう諸君を一人前の大人として扱う。早稲田に来るほどの学生ならば、単に他の人が大学に行くから自分も行くとか、親に言われたから行くこととは違う。青春の早稲田の四年間、やったぞと言えるものをつかんでほしい」と訴えておられる。その小山新総長が八月三日(出

※また十一月二十九日(金)には、午後六時より山形屋文化ホールにて日本近世文学の権威・暉峻康隆名誉教授の講演も予定され

の校友会支部総会に出席される。小山新総長を囲んで夏の一夜を語りあかそうではありませんか。

また嬉しいニュースはその日のエクステンションの講演会に人間科学部の吉村助教が決まったことである。吉村氏といえどエジプト調査隊、テレビ番組出演などでヒゲの吉村助教として活躍中の早稲田の売れっ子教授である。大いに期待して良し。鹿兒島支部の要請に多忙な中を快諾して下さったことにお礼を申し上げます。

小山新総長が卒業式の挨拶の中で早稲田の校友・歌人土岐善麿の詩「早稲田に入り 早稲田を出でし追憶は 老境にしていよいよ楽し」とうたわれているが、吾々の気持ちにびつたりである。

八月三日、城山に集まり楽しい一日を過ごしましょう。皆さま方の御健勝・ご多幸を祈念します。

ています。

多くの校友の皆様のご参加をお願いいたします。

会報委員

中村 眞・磯 大作

久保 英司・辛島 史朗

大西 儀朋